日本歯科医史学会々誌・第3巻
第1号通巻9号・昭和50年5月

明治初期の女医

酒　井　シ　ヅ*

明治以前からの女医

荻野吟子は明治になって施行した医師免許制度の試験に合格して女医となった最初の人であり，その波乱に富んだ生涯は渡辺淳一の小説『花埋み』で世間に広く知られるところである．

この試験制度は明治8年（1875）に東京，大阪，京都の三府でまず実施され，翌年にはほぼ全国的に行われたが，従来からの開業医は試験を受けることなく免許が与えられた[1]．

明治7年の記録ではこうして免許を受けた女医が2人いた．その1人がシーボルトの娘楠本いねであった[2]．

楠本いねは文政10年（1827），シーボルトと愛人お滝の間に生まれたが，2歳8ヶ月で父シーボルトと分れ，その後，長じて門人二宮敬作，石井宗謙に外科と産科を学び，安政6年（1859）にシーボルトが再来してからは長崎でポンペ，ボードウィン，マンスフェルトなどの蘭医についたのであった．

そして，明治3年，ボードウィンが上京するのについて，横浜に出て，東京築地で産科を開業した．この時，いねは43歳であった．

明治6年7月，いねは明治天皇の権典侍葉室光子の妊娠により，宮内省御用掛を命ぜられたが，これからみて解るように，いねの実力は相当なものであった．

築地での開業は明治10年2月に止め，3月には長崎に戻ったが，明治22年からは東京の麻布に住み，同36年8月26日に76歳で生涯を終えた[3]．

医術開業試験

医術開業試験は既述したように明治8年に東京，大阪，京都の三府で実施され，翌9年には内務省より各県にあてて，管内の医師，学術の現状を鑑みて，試験を施行すべきことを通達した[4]．それによって同年内にほとんどの県で試験制度が実施されたが，試験問題が県によって異るために，難易の差が出るという弊害が生じた．

また，仮規則のような形で始められたこの試験の受験者も増え，規則の整備も迫られて，明治12年2月「医師試験規則」が制定されて全国に通達された[5]．

この医師試験規則は15条からなり，その主な改正点は試験問題が全国統一となったことであった．しかし，これをもって行う方法が，各人の問題の密封したものを各府県に送付し，回答が再び内務省に送られて採点するという大変手間のかかる方法であったため，再度改正する必要に迫られるのであった．

この時の受験者の資格は医学校の卒業生あるいは内科，外科，眼科，産科等を2年以上学んだ者とあり，必ずしも学校を卒業しなくても医者になれたのであった．

一方，無試験で医師になれる者は日本官立大学ならびに欧米諸国の大学の医学部卒業証書を持つ者とあり，ここに例外が設けられた．

官立大学はこの時，東京大学だけであり，そこには，いわゆる正規のコースを学ぶ本科生と修業年限3年の通学生（のちに別課医学生と呼ぶ）との2種類のコースがあり，いずれの卒業生も無試験で免許が与えられた．

それに対し，明治14年ごろから，府あるいは県立医学校の卒業生に対し，別課の卒業生と同じように無試験で免許を与えよという陳情が続いた[6]．

それを受けて，明治15年に医学士あるいはそれに相当する学力を備えた者3名以上が教授し，生

婦人歯科医生誕80年記念会講演（昭和49年4月19日）
Woman doctors in early Meiji
* Shizu SAKAI　順天堂大学医学部

徒数に相当する助教を置くこと，また，修業年限を4年以上とし，学期を定め，教則並に試験法を完備した医学校には無試験で免許を与えるということが太政官より出され[7]，文部省からは，この条件を備えた学校を甲種医学校とし，修業年限を3年とする医学校を乙種医学校とするという布告があった．

ところが，翌16年には試験規則の改正が再び行われ，官立および府県立医学校の卒業生はすべて無試験で免許を与えることになった[8]．この背景には全国統一の試験問題になった結果，地方での合格者数が激減し，医師不足を齎したこともあった．

しかし，こうした無試験で免許を与える医学校には女子の入学は認められない．私立の医学校ですらなかなか女子を入学させなかったのであった．それ以上に医術開業試験の女子の受験が認められなかった．

女子の医術開業試験の願書の受理まで

荻野吟子など女子の医術開業試験の受験が許された最初が明治17年6月である．それまでも何回も何回も願書が出され，却下されることが繰り返されたのであったが，その最初は明治11年にみられる[9]．

明治11年11月，東京府から内務省宛に「婦人にて医術を修養せしものは試験のうへ開業に相成りて然るべき哉」と問い合せたのに対し，「当分の間，何分の詮議に及びがたし」と回答があった．

また，明治14年4月に長崎県から同様の問い合せがあったが，それに対しても同じ回答をしている．

個人的には，明治15年10月に医学校を修了した荻野吟子が募集のたびごとに願書を出し，却下されることを繰り返していたが，同じように，2番目に女医になった生沢クノ，3番目の高橋瑞子などがくり返し願書を出していた．

結局，明治17年に女子の受験が許可されたが，それには，こうした女医志望の者の熱意だけでなく周辺の社会事情の変化，あるいは時の医学界の実力者であたっ石黒忠悳，高木兼寛などの理解と助言があったことも一因であろうが，決定的なことは荻野吟子が充分，医者になれるだけの実力を備えていることを衛生局長の長与専斎が知ったためであろう．

荻野吟子

荻野吟子[10]は嘉永4年（1851）3月3日，埼玉県大里郡秦村の荻野綾三郎の5女に生れた．16歳まで何不自由なく育ち，親の言うままに結婚したが，不幸なことにここで夫から性病をうつされ，それがもとで身体をこわし，離縁となった．

実家に帰ったのち，明治3年に佐藤尚中の治療を受けるために上京し，翌年まで東校で入院加療をしたが，この時，医師になることを決意したと言われる．つまり，そこで婦人病に悩む者が，男医の診察を受けることを恥じるばかりに医師にみせず，不必要な苦痛に耐え，悪化させている者の多いことを知ったのであった．吟子自身も，あれほど悩まされた病苦が医学の力ですっきりと治ることを経験し，患う者を救いたいという気持を強くいだいたのであろう．

東校を退院したのち，一度は郷里に戻ったが，再び明治6年に上京し，井上頼圀に国学を学び，明治8年10月に創立されたばかりの東京女子師範学校に入学した．

明治12年7月，そこを卒業すると，教師にはならず，いよいよ医学の勉学のため，東京大学の別課への入学を望んだが許されず，私立の医学校に入学すべく，方々に当ったが，皆，拒絶されたのであった．

それで，石黒忠悳をたずね，その意向を伝え，医学校の入学のための口添えを頼んだ．そして，ようやく開校したばかりの高階経徳の経営する好寿医院に入学できたのであった．

そこを卒業したのが明治15年10月であり，それから後は前述したように大変苦労して，医術開業試験の受験許可を得たのであった．

明治17年には，医術開業試験制度の大改正があって，それまで一度で済んだ試験を前期と後期の二度，春と秋に行なうことになった．

荻野吟子は明治17年9月の試験に木村秀子，松

浦さと子，岡田みす子の3人と一緒に受験したが，合格したのは吟子1人であった[11]．そのことは当時の新聞紙上を大いに賑わしたが，医学関係の雑誌はきわめて冷淡に受け止めた．中外医事新報では他の合格者の中に，「荻野吟，埼玉県」と名前と出身地が記してあるだけである．

翌年3月に吟子は後期の試験にも合格しているが，この時，東京での後期受験者は132名で合格者はたった24名であった．吟子はいずれも一度で合格しているのからみて，実力は並々ならぬものであったことがわかる．この時，吟子は35歳であった．

女医第2号の生沢クノは，この年に前期試験に合格し，明治19年11月に後期に合格した．

生沢クノ

生沢クノは荻野吟子と同じ埼玉県の出身であった[12]．元治元年（1864）に大里郡深谷町（深谷市）の蘭医生沢良安の女に生れた．

クノは生来，右頬に小児手掌大の血管腫があった．そのことが彼女を医者にさせた動機になったかもしれない．クノは14歳で上京し，東京府病院の見習生となり，山崎元脩の下で産科を学んだ．医術開業試験に備えて，明治15年には東亜医学校に入学し，翌年6月に東京府に願書を出し，却下され，8月には埼玉県に請願書を添えて願書を出したが，これも却下されてしまった．

その請願書には女医の必要性をつぎのように書いている．

「……婦人ノ性コレ柔和軟弱，物ニ怖レ，人ニ恥ジルアリテ，生殖器等ニ疾病崩発異常ヲ知覚スルモ恥ジテ，夫ニダモ告ゲ語ラズ，為メニ初メ軽易ノ疾病モ終ニ進デ治シ易カラザルノ症ニ陥リ，痛苦忍ブベカラザルノ期ニ至リ始メテ実ヲ良夫ニ告ゲンモ，医ヲ延テ生殖器内詳細ノ検査ヲ受クルヲ恥ジ，言以テ症状ヲ語シ，子宮鏡等ノ検査診断ヲ拒ム者ナシトセズ．……私不肖ナレドモ意ヲ此ニ止メ医学ニ従事スルコト別紙履歴書ノ如シ，願クハ受試問ノ上，女医トナリ，女同志コソ婦人生殖器病ヲ診断セバ患婦モ又女同志ノ診断ヲ受クルコト幾分カ恥ル心モ少ク，軽易ノ症モ速ニ検査ヲ受クルコト必セリ……」

生沢クノも荻野と同じように，女子が婦人病の診察を受け易くするために女医が必要だと主張したのであった．クノはその輝しい履歴にもかかわらず，その後の消息は，荻野や3番目に女医になった高橋瑞子ほど華かでなかった．静かに，片田舎での開業に甘んじ，独身で生涯を通した．歿年は不明だが，昭和18年に80歳で健在であったという[21]．

高橋瑞子

3番目に女医になった高橋瑞子は，吉岡弥生をして，日本の女医の生みの親は荻野であるが，育ての親にあたるのが高橋瑞子だといわせしめた人である．

高橋[13]は荻野と同じように初婚に破れた人であったが，性格や容貌はまるっきり違っていた．高橋は男まさりで，衣服に無頓着で，がむしゃらに医者になっていったが，その動機は医者は収入が良いからということであった．荻野の理想主義に対し，高橋は現実主義者であったのだ．その結果，晩年は高橋は名を遂げ，悠々自適の生活を送ったが，荻野はクリスチャンとなり，女性解放運動に活躍し，明治23年に年下の志方之善と再婚してからは，キリスト教徒の理想郷を開くために北海道に渡ったが，それも夫の死や現実と理想のギャップが大きすぎたこともあって，失敗に終り，傷心をかかえて明治41年に東京に戻り，向島でひっそりと開業して，大正2年（1913），女医になってから30年の生涯を終えたのであった．

高橋は嘉永5年（1852）10月24日に三河国幡豆郡西尾町に生れた．生来，人の下に立つことを好まない性格で，周囲との折り合いがうまくつかず，初婚に破れたが，まず自活の道をということで産婆になるため，明治12年に群馬県の前橋で世間に広く名が知られていた産婆津久井磯子についた．ところが明治14年，東京で産科医桜井郁次郎が紅杏社を設け，産婆教育を始めたことを聞いて，是非，そこに学びたいと申し出て，明治15年にそこに入り，学費は津久井の援助を受けたのであった．

明治16年10月には内務省の産婆試験に合格し，翌月には大阪に行き，高橋正純のもとで内科，外科と産科を学んだのである．

それより先，同年3月，同じように桜井産婆学校に在学し，医師を志望した同志の長井せいと岡田みすと共に内務省衛生局の長与専斎をたずね，女子の受験許可を求めたのであった．

明治17年，大阪にあった高橋のもとに，女子の受験が許可となった朗報が飛び込むや直ちに，上京し，受験準備にとりかかったが，それにはまず医学校に入学するのが早道であると考えた．しかし，既に女子学生を入れている成医会医学所（東京慈恵医科大学の前身）は月謝が半年払いであるため，高くて入れない．それで，済生学舎に入ろうとしたが，その時はまだ女子の入学を認めていなかった．そこで，高橋は校長の長谷川泰の快諾を得るまでと3日3晩門前に立ちつくしたという逸話がある．

高橋の粘りに負けて，明治17年12月より済生学舎は女子学生の入学を認めたのであった．それから明治34年に女子の入学を禁止するまでの間，済生学舎に学んで女医になった者の数は百名近くにもなった．吉岡弥生もその1人である．

高橋は明治18年3月（一説には19年），前期の試験に合格し，つづいて後期の臨床試験にそなえて順天堂に学び，明治20年4月に後期の試験に合格したのであった，順天堂でも高橋がはじめての女子の通学生であった．

高橋は明治23年にドイツに留学したが，結核のために1年足らずで帰国をしている．

しかし，彼女のやり方は安易な道を選ぶのではなく，誰もしようとしないが，可能性があるとみれば，強引にやり遂げている．そのために，後輩の女医の生き方には飽き足らず，自宅にはあまり女性を置かなかった．自身も男装し，男医との付き合いの方が多かったようである．

昭和2年，76歳でその生涯を終えたが，生涯の前半の苦労が，彼女に任侠の気風を身につけさせ，日本橋での開業に成功したのだろう．

本多銓子[14]

4番目に女医になったのは，本多銓子であった[15]．本多はそれまでの3人からみれば，比較的に恵まれた環境で医師となり，主婦となって，平和な生涯を終えた人である．しかし，それでも女医を志望した時にはまだ女子の医術開業試験の許可がでるかどうか解らない時であり，男子学生の中に混って，並大抵でない苦労をして勉学を続けたのであった．

本多は元治元年（1864），幕臣本多晋の娘に生まれた．明治5年2月，東京竹橋に創立された英語教育の女学校に入学した．この女学校は通称竹橋女学校と呼ばれたが[16]，開校時はわずか25名であった生徒が日を増すにつれて増し，百人前後となったため，11月下旬に東京第四大区第二小区竹平町に校舎を移し，東京女学校と称した[17]．

同校は明治10年2月，文部省の経費の都合によって廃止となり，その後は女子師範学校内に英語科を置いて，東京女学校の生徒を収容した．

明治15年，荻野が医術開業試験に願書を出し，却下されるなど世間で女医の存否が話題になってきた時，高木兼寛は自分の主宰する成医会医学講習所に女子学生を試みに入学させたのであった[18]．

成医会医学講習所はイギリスでの留学を終えて帰国した高木兼寛を中心に明治14年5月に開校した．生徒には定期生と期外生の二種のコースが置かれた．女子学生は東京女学校に学んだ英語に堪能な生徒を2名選び，期外生として入学させたのであった．それに本多銓子が松浦さとと共に選ばれた．

2人とも選ばれた者という責任を負って懸命に勉学し，松浦は明治17年9月に荻野と一緒に前期試験を受験したが失敗した．翌18年には合格したが，結核を発病して後期の受験を放棄せざるを得なかった．それで療養後，東京慈恵病院の看護婦取締となったが，明治24年に若い生命を終えた[18]．

本多は明治19年には前期に21年に，後期にそれぞれ合格した．

明治22年から，後述の岡見ケイ子が東京慈恵病院の婦人科を担当した時に，その助手となり，のちに自宅で開業した．

本多は，それまで女医になった者でははじめて結婚し，家庭生活と両立させようとしたが，明治30年に主婦に専念すべく，医業を廃業してしまった．

岡見ケイ子

岡見ケイ子は日本で最初の外国の医学校を卒業した女性である[19]．

岡見は安政6年（1859）に南部藩の商人，西田耕平の娘に生れた．慶応3年，父が貿易商に転向したため一家は上京した．父の商売相手が主に英人であったためか，一家は進歩的な気風を持ち，ケイも明治6年，横浜共立女学校に入学した．ここはいわゆるミッション・スクールで，そこに在学中にケイは洗礼を受けている．

明治11年，横浜共立女学校を卒業してから，竹橋女学校に入学し，明治13年に，そこが廃止された時にそこを辞めたと記されているが，前述したように，竹橋女学校は明治10年に廃校となり，その流れはお茶の水にあった東京女子師範学校の別科（英語科）となったが，翌年4月に別科も廃止となった．従って，岡見の履歴にある竹橋女学校がその別科を指していたのか，あるいは明治10年までのことなのか，さらに検討を要する．

明治14年に，桜井女学校に英語の教師として就職するが，そこで，そこの教師の宣教師ミセス・ツルーに出逢ったことが，彼女を医師に転職させたきっかけになったと思う．

ミセス・ツルーは日本での看護婦養成の必要を唱え，アメリカで募金活動を行う途上，斃れたミセス・バラ J. H. Ballagh の遺志を継いで，明治19年から桜井女学校で看護婦養成をてがけた人である．

岡見は，明治17年，頌栄女学校の画の教師岡見千吉郎と結婚したが，千吉郎自身もクリスチャンであった．頌栄女学校は彼の一族の創立した学校である．ケイとは貧民伝道という活動を通して共鳴しあったのであった．

結婚後1ヶ月で，千吉郎はミシガン大学で農学を学ぶために渡米し．その3ヶ月後にはケイがペンシルバニア女子医科大学に学ぶために渡米したのであった．

ペンシルバニア女子医科大学には当時，ケイのほかにインドとシリアから来た2人の外国人留学生がいた．というのは，当時の学長 Rachel Badley が同校の卒業生を海外で医療を通して伝導活動に従事させると共に，低開発国の女性を同校に学ばせる方針を立てていた．その最初がインドから来た留学生であり，ケイは2番目の留学生であった．そこに4年間学んで，明治22年に卒業し，日本では女性としてはじめて M.D を獲得した．同年3月，夫と共に帰国し，東京慈恵医院の産婦人科の主任になった．しかし，そこには明治25年6月（一説には9月）まで在職し，のち赤坂の自宅で開業したが，この時，退職した理由が慈恵病院に明治天皇の行幸があった時に，彼女が女であるがために拝謁を遠慮せよといわれたことによるとある．しかし，この頃，天皇が慈恵病院に行幸された事実はない．彼女をそこを去った理由はほかにあったのだろう．

明治26年に現在の新宿の角筈に婦人専用の結核療養施設「衛生園」を設けたが，4年後の明治30年には経営が行き詰り，赤坂病院に併合されて，その分院となった．

明治39年から41年まで，女子学院の英語の教師となったが，乳癌となり，一切の公職から去った．幸いにも，この時は早期手術で治癒したが，医業もやめ，すっかり引き籠ってしまった．

夫千吉郎には昭和11年に先き立たれ，その頃からケイも乳癌の再発に冒され，昭和16年に81歳の生涯を終えた．

ま と め

明治18年，女子の医術開業試験の受験が許可されて，今日まで数多くの女医が誕生したが，ここでは，その初期の5人を中心に，開拓者たちの姿を追ってみた．

いずれも，自己の力を最大限に発揮することに執心し，ある程度まで満足できる結果を得られた人達であるが，医師になろうと困難に敢えて立ち向っていったそのエネルギーの源には2種類のものがみられる．

その一つは荻野，生沢，高橋にみられるような，人生のつまづきや不具などで，順当な生活への絶望であり，第二のものは文明開化のパイオニアとしての使命感であった．もちろん，荻野自身はパイオニアとしての自覚も持ち，女性解放運動の先頭にたったので，完全に両者に分類できない．

女医になってからは高橋や生沢のように開業医として成功して，その生涯を終えたもの，荻野や岡見のように，理想を実現するために働き，挫折感を味わったもの，本多のように医業と主婦の両立ができず，医業を放してしまった者とに分れる．

いずれの道を歩んだ人も，数少ない女医ということで珍しがられ，衆人環視の状態で生活したのであった．そこには気負いもあり，今からでは想像もつかぬ努力と忍耐を強いられることもあったであろう．

文　献

1）内務省衛生局，医制五拾年史．大正14年，96.
2）秋山寵三：日本女医史．日本女医会本部，昭和37年，44～45.
3）呉　秀三‥シーボルト先生．（2）東洋文庫，平凡社，昭和43年，206～210.
4）内務省衛生局．前掲書，116～117.
5）同上書，172～174.
6）同上書，199～201.
7）同上書，197～198.
8）同上書，206～208.
9）秋山寵三：前掲書，92.
10）北海道医師会・医政史編さん委員会，荻野吟子．昭和43年.
11）秋山寵三，前掲書，79.
12）同上書，67～69，80～83.
13）同上書，99～72，83～91，122～128.
14）東京慈恵会医科大学八十五年史には本多鈴となっている．
15）秋山寵三：前掲書，91～93，134～135.
16）石井研堂，増補改訂明治事物起原．春陽堂，昭和19年，443～444.
17）文部省，学制五十年史．大正11年，52～54.
18）東京慈恵会医科大学八十五年史，37～39.
19）長門谷洋治，岡見京子：女子医学留学生1号．日本医事新報，1807，49～54，昭和33年.
20）秋山寵三：前掲書，178～188.
21）生沢クノは晩年に足利市岩根婦人科病院の副院長として勤め，そこを退職した後，深谷に戻り，昭和20年6月18日に死去した．